

公開講演会発表要旨

平城京の荷札木簡について 荷札木簡が国・郡・郷のどの段階で作成され、それはどこでの勘査に用いられるためかという問題で、今日議論が交わされている。本報告では、荷札木簡の大部分が郡で作成され、それは国府での勘査に資するためである、とする有力な説に対して、新出の二条大路木簡を主たる材料として分析し、検討を加えた。その結果、荷札木簡作成においては国・郡・郷毎にそれぞれ共通点が見いだされ、郡の役割を過大に評価すべきではないこと、国府での勘査を示すとされる史料が十分な根拠をもつものではないこと、などからあくまでも京における納入時の勘査のために作成されたと考えるべきことを論じた。 (寺崎保広)

弥生社会のはじまり — 木葉紋と流水紋から — これまでの研究で、弥生人が好んで描いた紋様のうちに実は縄文社会で生みだされたものがあることが明らかにされている。その代表的な紋様が、木葉紋と流水紋である。しかもこの二つの紋様は、ともに日本列島に弥生文化が広まったごく初めに採用されているにもかかわらず、そのあり方がこの二者で大きく異なっている。二つの紋様の細部を具体的に検討して、①木葉紋のうちのあるものは流水紋より古く、西日本の前期初頭に位置すること、②縄文社会の紋様を忠実に受け入れたのは流水紋の方であったこと、③それには時間的な併行関係が深く関与していたこと、④弥生化する過程で、弥生社会自体の特殊な構造がかかわったこと、などを指摘した。 (深澤芳樹)

ワット・プーとラオスの文化遺産 ワット・プーは、ラオス南部にあるヒンドゥー寺院で、現存する建物群は11世紀初頭の建立と考えられます。壮大な石造遺跡がバサック山の山裾から山腹に連なり、東を正面とし、上段に主堂・経蔵、中段に六つのストゥーパ、下段に二つの宮殿と聖牛殿、さらに東にはバライがあります。東西の中軸線上に参道が通り、階段と門の基壇が残っています。しかしすでに建物の屋根は失われ、一部は倒壊していて早急に保護と援助の手を待ち望んでいます。ワット・プー以外にも、北部ジャール平原の巨石文化や歴史的な王都ルアンパバーンなど、さまざまな文化遺産がありますが、ラオスにおける文化財保護は緒についたばかりといえます。幸い、このたび日本の文化財保護の状況を学ぶ機会を得ましたので、この経験をラオスの文化財保護のために役立てたいと思っております。

(ラオス情報文化省博物館考古局長 トンサ・サヤウォンカムディ 上野邦一抄)

文化財の保存科学と国際交流 保存科学とは自然科学的手法を応用して文化財の保存修復技術の開発とそれに必要な調査に当たる研究分野である。当研究所で最初に招聘した海外からの保存科学研究者は、バイキング船の化学処理を成功させたデンマーク国立博物館のクリスティンセン保存科学部長であった。1970年のことである。以来、当研究所と世界各国の研究門との交流事例は百件を数え、その4割が保存科学関係者であった。そのなかには、国民性や国情のちがいが保存科学技術交流以前の障害になることも多かった。しかしながら、技術と文化の国際的交流をとおしての新時代の構築は、こうしたハードルを越えようとする互いの自強にこそ託されている。 (沢田正昭)